

矢作川
探訪マップ

愛知県豊田市

矢作川ってどんな川?

矢作川（やはぎ）は、長野県の大川入山（標高1,908m）に源を発し、長野、岐阜、愛知の3県を流れ、三河湾に注ぐ中規模の一級河川です。その幹線流路延長は118km、流域（降った雨が川に注ぐ範囲）の面積は1,830㎢です。

地形

流域の地形は、源流部から豊田市中心部付近までの山地・丘陵地と、それより南の平野部に大別されます。地質は山地・丘陵地域に花崗岩と変成岩が広く分布し、平野部の沖積低地には砂、砂礫や粘土、シルトなどの未固結の堆積物が厚く堆積しています。

気候と植生

矢作川流域を含む東海地方の気候は、夏期の高温・多雨、冬期の低温・乾燥に特徴付けられる太平洋側の気候条件下にあります。流域内には約1900mの標高差があるため、内陸で標高が高く、より寒冷な源流部から、標高が低く温暖な河口付近にかけて気候が変化し、年平均降水量も上流から下流にかけて減少しています。

このような気候の変化に対応して、流域内には亜寒帯性の針葉樹林、温帯性の落葉広葉樹林、暖帯性の常緑広葉樹林など、さまざまな植生が存在しています。

特徴

・高い水利用率

矢作川の流域人口は推定130万人に上り、その多くは豊田市と岡崎市の中心部に居住しています。中～下流部は一大農業・工業地帯で、農業・工業・上水道用水と電力を供給するため、河口から34～80km地点までの46kmの区間に7つのダムが建設されており、河川利用率は平均40%以上と、中部地方では高い値になっています。

・住民による環境保全活動

矢作川には住民が主体となって進めてきた流域の環境保全活動の長い歴史があります。沿川の農業・漁業団体や自治体などで設立された矢作川沿岸水質保全対策協議会（矢水協）は水質保全の取組と、上流と下流の多様な交流を進め、その活動は「矢作川方式」と称されました。創設者内藤連三氏の「流域は一つ。運命共同体」という言葉は、矢作川流域の住民による環境保全の思想を象徴するものとなっています。



川を歩くときは



- ゴミはすべて持ち帰りましょう。
- 動植物を大切にしましょう。
- 川で遊ぶときは十分注意し、子どもたちだけで水辺に近づかないようにしましょう。
- 大雨の後は増水していることがあるので、川に近づかないようにしましょう。
- ダムの下流は急に増水する場合があります。水の放流を知らせるサイレンが鳴ったら川から離れましょう。
- タバコなどの火気は、火事の恐れがあるので十分注意しましょう。
- 車は決められた場所に駐車しましょう。
- 決められた場所以外へ車で入るのはやめましょう。
- 川の中に車を乗り入れることは絶対にやめましょう。

こんなものを持って行くと便利!

- ビニール袋 … ゴミや濡れたもの、採集したものを入れましょう。急な雨の時はカッパがわりにも。
- 帽　　子 … 川辺は日陰が少ないので、特に夏は必ずかぶって出かけましょう。
- 飲　み　物 … 川の水は飲めません。飲み物は自分で用意しましょう。
- 双　眼　鏡 … 野鳥観察を楽しみたいなら必需品です。
- レジャーシート・アウトドアチェア … 休憩時に。レジャーシートは堤防を使った草滑りにも使えますが、芝をいためないよう気を付けましょう。

参考文献：神谷素光（2000）矢作川歴史紀行，郷土出版社．勘八峡山水会（2013）勘八峡紀行，新行紀一（2003）定本　矢作川，郷土出版社．
矢作川の生き物「クワセミ」執筆・写真提供：高橋伸夫氏

マップに関するお問合せ
豊田市矢作川研究所
〒471-0025 愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1階
TEL: 0565-34-6860　FAX: 0565-34-6028　E-mail：yahagi@yahagigawa.jp

2018年3月31日発行
2024年3月31日改訂

矢作川の生き物



アユ

海と川とを行き来する回遊魚で川底の石についた藻類を食べて育ちます。食べて美味しく、釣って楽しい人間とのつながりの深い魚です。桜の咲く季節になると三河湾から多くのアユが遡上しますが、年による変動が大きく、その差が10倍以上になることがあります。泳ぐのが大変に得意な魚で、エサの藻類を独占するためになわばりをつくります。夏に大きく育った成魚は秋になると川を下り、流れの速い瀬で産卵して1年の短い生涯を終えます。

● よくみられる時期　春～秋
● よくみられる場所　流れの速い所



ニホンウナギ

食材として日本では馴染み深い魚。未解明な生態が多い魚ですが、遠い南の海で産卵し、生まれた子どもは海流にのって東南アジアの沿岸にやってきます。それらの一部が矢作川や支流などで生活しており、釣りやガサガサで捕まえることがあります。川の中で観察すると、川底に潜っていたり、石と石のすきまに隠れていたりと、自分の体が何かと触れているのを好むようで、顔だけを出して、こちらの様子を伺う姿は、とても愛くるしいです。

● よくみられる時期　いつでも
● よくみられる場所　石と石のすきま



ヒゲナガカワトビケラ

幼虫は石がゴロゴロした川底で普通にみられます。矢作川の上流から中流の代表的な水生昆虫です。幼虫の体は芋虫型をし、胴体は光沢のある黒褐色、頭部は細長く黄色地に黒斑があります。拡大して観察するとつぶらな瞳がとても愛らしく感じます。成虫は灰色と黒色が混ざった羽根を持ち蛾のように見え、長い触角（ヒゲ）を持っています。幼虫は佃煮にして「ザザムシ」という名前で土産物となっている地域もあります。

● よくみられる時期　幼虫：年中　成虫：4月～5月と9月～10月
● よくみられる場所　幼虫：川底の石と石のすきま　成虫：川岸のヨシの葉上



カワセミ

名前は漢字で翡翠とも書かれる美しい鳥です。上面は光沢のあるコバルトブルー、下面の赤橙色との対比も見事で、まさに飛ぶ宝石です。戦後農薬により極端に数を減らして幻の鳥といわれましたが、現在はその数も回復しています。矢作川だけでなく農業用水路やため池など、水辺であればどこでも見ることができます。上下の嘴が黒いのが雄、下嘴が橙色なのが雌、下面の色がくすんで黒っぽく見えるのが若鳥で、雄の成鳥が一番綺麗です。

● よくみられる時期　いつでも（自転車のブレーキのような声）
● よくみられる場所　小魚の多い水路や池

矢作川の生き物



ニホンカワトンボ

中型の流水性のトンボで、成虫の翅の色はオス、メスともに地域によって違い、中部地方ではオスは茶色、メスは薄茶色と透明の翅の個体が見られます。未成熟の個体は胴体が金属光沢のある青緑色で、成熟すると写真のような青白い粉をふいた色になります。とてもよく似たトンボにアサヒナカワトンボがいます。オスはなわばりを持って近付いてきた他のオスを追い払い、メスがやってくるとホバリングをして求愛します。幼虫は流れの緩い岸際の水中で、1～2年過ごします。

● よくみられる時期　春～夏
● よくみられる場所　水辺の植物や川面から頭を出している礫の上など



タマムシ（ヤマトタマムシ）

体全体が金緑色や銅赤色、紫藍色の金属光沢で彩られており、法隆寺宝物「玉虫厨子」の装飾に使われていることで有名です。その色合いは見る角度で変わり、あまりの美しさから、英語では「Jewel　beetle（宝石のような甲虫）」と呼ばれています。成虫は体長30～40mm、寿命は2ヶ月程度で、メスはエノキやケヤキ、サクラなどの枯木に産卵します。成虫は樹上の高い場所を飛翔するためあまり見かけませんが、エノキの多い矢作川河畔をよく観察すると、産卵のため集まってきたタマムシを見ることができます。

● よくみられる時期　7月～8月（成虫）
● よくみられる場所　天気の良い日中に、堤防や河川敷に生えたエノキやケヤキの樹上を飛翔していることが多い



エノキ

矢作川中流の川辺に生える樹木の中で、最も多く見られるのがエノキです。アサ科の落葉広葉樹で、樹高20m、幹直径70cm以上の高木となっている個体もあります。こんもりした特徴的な樹形となり、かつては一里塚に植えられ、旅人たちに憩いの場となる木陰を提供しました。赤い実は鳥たちが好んで食べます。また国蝶で、準絶滅危惧種でもあるオオムラサキの幼虫は、エノキの葉を食べて成長します。エノキダケはもともとこの木に生えるため、その名がつきました。

● この種とわかる時期　いつでも（秋は黄葉します）
● よくみられる場所　堤防～河川敷



ツルヨシ

矢作ダム下流の全域で、河川敷の草地に見られるイネ科の多年生草本です。よく似たヨシは高さ3mになるのに対しツルヨシは1.5m程度で、地上を這う茎があることから両者を見分けられます。名前の由来でもあるこの匍匐茎は長さ数mにもなり、途中の節から根と新しい芽を出して、新しい陣地に群落を広げていきます。ヤナギ類の芽生えとともに水をかぶったり、砂に埋もれた後の回復力が際立って早く、林のない河川敷は大きな出水後、ツルヨシとヤナギ類ばかりになることがあります。

● この種とわかる時期　春～秋
● よくみられる場所　河川敷の砂礫地で高水がないかまばらなところ

矢作川の舟運

かつて矢作川は物流の大動脈の一端を担っていました。矢作川は江戸時代の1605（慶長10）年に徳川家康の命令により新川の開削が行われ、堤防が築かれたことで流路が定まりました。そのおよそ60年後には物資を運ぶ多くの川船が川を行き交うようになりました。その数は全盛期には100隻ほどもあったそうです。

川船は浅瀬でも通れるようになっている帆掛け船で、長さ19m、幅2.7mでした。夫婦二人で乗り込むことが多く、船尾に苫（とま）といって生活する場所がありました。積み荷は6トンほどで、川を上る物資は綿、米、麦、大豆、味噌、魚肥など、下るのは木材、竹、薪、炭、石材などでした。

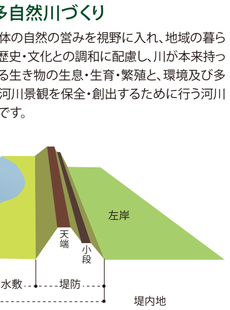
舟運は1661（寛文元）年から続いていましたが、1929（昭和4）年に越戸ダムができて水量が減り、渡し船があった場所に次々に橋が架けられると、次第に衰退しました（1880・明治14年に越戸ダムより下流で開削された明治用水には船通し・筏通しがありました）。

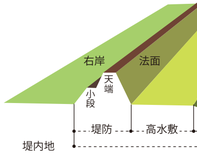
航程は西尾市中畑町の中畑橋付近から豊田市平戸橋付近までの40km程でした。川岸には要所要所に荷物を積み下ろしする土場（川湊）がありました。土場によって所有者や扱う荷が異なっていました。

＊筏流しと百々貯木場

明治時代に入ると、上流で伐採された木材を下流に出荷することが盛んになりました。伐られた木材は奥山から運び出すためのキンマ（木馬）道を通って、豊田市旭地区の小渡はじめいくつかの上流の土場に集められました。1881（明治14）年に木材を筏に組み、櫂で操り下流に流す筏流しの技術が発明され、大量輸送が可能になりました。

木材は問屋土場の対岸の百善土場で集荷されましたが、当初は貯木場がなかったため、木材が下流に流されたり、乾燥して割れるなどのトラブルが発生しました。そこで1918（大正7）年に木材を矢作川から引き込み、水の中で保管する百々貯木場が竣工しました。しかし越戸ダムができて水上輸送が困難になり、その役割を終えました。





川のことば

● 左岸と右岸
川を上流から下流に向かって眺めたとき、左側を左岸、右側を右岸と呼びます。

● 堤内地と堤外地
堤防によって守られている区域（人が住んでいる区域）を堤内地、堤防にはさまれ、川が流れている土地を堤外地と言います。

● 低水路と高水敷
常に川が流れているのが低水路です。高水敷は低水路より一段高く、ふだんは水が流れていませんが、洪水時は水に浸かります。

● 氾濫原
堤外地で洪水の時に川の水が氾濫する部分で、さまざまな水生生物が利用します。

● 床止め・床固め
川底の洗堀（水の流れで削られること）を防いで川の勾配を安定させるため、川を横断して設けられる施設です。床止めに落差があれば落差工、なければ帯工と呼びます。

● 瀬と淵
瀬は川の中で水深が浅く流れが速い場所、淵は水深が深く流れが遅い場所です。

● 天端、法面、小段
堤防の一番上にある部分を天端、堤防の斜面を法面、堤防の天端と地面の間にある水平な部分が小段です。

● 水制工
水の流れる方向を変えたり、水の勢いを弱くして、浸食など川を流れる水の作用から川岸や堤防を守るための施設です。

● 頭首工
川や湖などから農業用水を引き入れるための施設です。

● 多自然川づくり
川全体の自然の営みを視野に入れ、地域の暮らしや歴史・文化との調和に配慮し、川が本来持っている生き物の生息・生育・繁殖と、環境及び多様な河川景観を保全・創出するために行う河川管理です。

矢作川探訪マップ

私たちの母なる川、矢作川。その魅力を十分に楽しむために、川を見ながら歩ける散策コースと川を一望できるスポット、川への興味がふくらむさまざまな施設をご紹介します。

0　500m

- P 駐車場
- WC トイレ
- 水辺愛護活動地
- ウォーキングコース

Aコースを含む平戸橋の上流約4kmの区間は勘八峡と呼ばれ、1927年に愛知新十名所に選ばれました。勘八峡の大部分は2年後に越戸ダムに水没しましたが、ここを歩けばかつての面影を偲ぶことができます。

A コース：平戸橋公園（右岸）

BコースとCコースには、江戸時代から大正期にかけての舟運が盛んだった時代、多くの土場(川湊)があり、交易の要衝地として栄えていました。矢作川の歴史を感じられるコースです。

B コース：平戸橋～籠川合流点（右岸）

C コース：古鼡水辺公園～百々の水辺（左岸）

D コース：籠川合流点～久澄橋（右岸）

E コース：高橋～御立公園（左岸）

DコースとEコースは、豊田の中心市街地から最もアクセスがよく、豊田市が親水性の高い水辺づくりを進めているエリアです。まちなかを流れる川に天然アユが上り、緑豊かな川辺にたくさんの生き物たちがすむ、ちょっとした「奇跡」を体感してください。

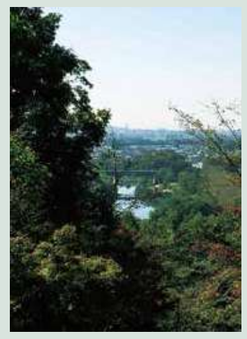
豊田市の水辺愛護活動

豊田市内では矢作川および市内河川で、25の「水辺愛護会」（会員数約800人・2023年4月1日現在）とNPO矢作川森林塾など複数の市民グループ・企業が河畔林の保全活動を行っています。高度経済成長期以降、人が川に近づかなくなり、川辺は竹や木が生い茂った暗い林となりました。そのような場所で、竹や木の間伐、草刈り、ごみ拾いなどを行って、川が見通せる景観をつくり、川に近づける親水空間を維持して川と人を結ぶ大きな役割を果たしています。

水辺愛護活動地

① 矢作川漁業協同組合

② 前田公園



旧猿投(さなげ)村で幼少期を過ごし、土木請負業で名を成した前田栄次郎が、昭和初期に私財を投じて平戸橋町北部の高台に造った公園です。101段の石段を上って小高い丘の上に立つと、矢作川にかかる平戸橋と猿投山を一望できます。

③ 豊田市民芸館

旧猿投村出身の実業家・古陶磁研究家、本多静雄の貢献により1983年に設立されました。建物は東京の日本民藝館改築時に一部を移築したものです。民衆や民間の工芸「民芸」に関する資料の保存・展示を行っています。

④ 平戸橋公園



春の桜、秋の紅葉の名所として古くから知られています。この付近は勘八峡と呼ばれる景勝地でした。勘八の名は、江戸時代に近隣の村々を荒らし回った盗賊の名に由来します。

⑤ 波岩(はいわ)水辺公園



平戸橋直下の右岸にある、川岸に露出した大きく平らな花崗岩の岩盤が「波岩」です。白い帯の伝説があります。

⑥ 石倉水辺公園



増水時に水が上流側の波岩を乗り越え、ここの岸を直撃するのを防ぐためにつくられた護岸設備「石倉」があります。

⑦ 旧平戸橋の碑

⑧ お釣(つりど)土場水辺公園



矢作川中流の河畔のモデル林として1996年度に、密生した竹林を伐採して整備されました。エノキやムクノキの大木の下に、様々な低木や野草が見られます。土木学会景観デザイン賞優秀賞を受賞しました。

⑨ 表州(ひょうす)水辺公園



⑩ 古鼡(ふっそ)水辺公園



1992年、日本で初めて近自然工法による水制工（護岸のための工作物）が造られたことをきっかけに、竹林を伐採して整備されました。土木学会景観デザイン賞優秀賞を受賞しました。

⑪ 百々(どうど)貯木場

上流から流された木材を引き込み、水の中で保管する施設です。大正～昭和初期に使われました。豊田市有形文化財、土木学会選奨土木遺産となっています。

⑫ 百々の水辺



⑬ 流れ橋跡

ワイヤーでつないだ橋桁を洪水の時に流し、その後人力で復旧する様式の橋です。戦後、越戸町と百々町を結ぶ歩行者専用の橋として架けられ、1959年に伊勢湾台風で壊れるまで使われていました。

⑭ 籠(かご)川合流点



⑮ 千石公園



⑯ 豊田スタジアム

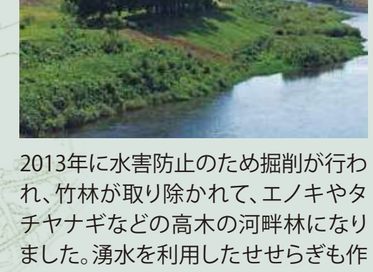


2001年に建てられた球技専用スタジアムで、建築家の黒川紀章が豊田大橋とともに設計しました。名古屋グランパスのホームスタジアムの一つであり、2019年にはラグビーワールドカップの試合会場となりました。

⑰ 矢作川豊田防災ステーション

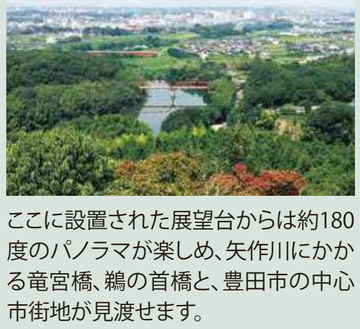
洪水時の水防活動や緊急復旧活動の拠点として、国土交通省の河川防災ステーション整備計画に基づき、水防管理者と河川管理者が一体となって整備しました。

⑱ 御立(みたち)公園



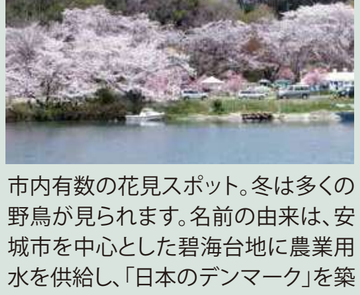
2013年に水害防止のため掘削が行われ、竹林が取り除かれて、エノキやタチヤナギなどの高木の河畔林になりました。湧水を利用したせせらぎも作られています。

⑲ 野見山展望園地



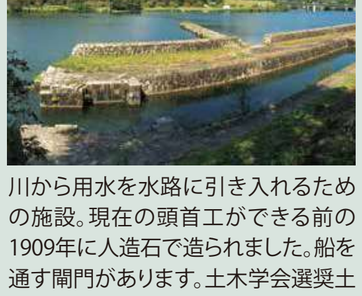
ここに設置された展望台からは約180度のパノラマが楽しめ、矢作川にかかる竜宮橋、鵜の首橋と、豊田市の中心市街地が見渡せます。

⑳ 水源緑地



市内有数の花見スポット。冬は多くの野鳥が見られます。名前の由来は、安城市を中心とした碧海台地に農業用水を供給し、「日本のデンマーク」を築いた明治用水の取水口がある土地を「水源町」としたことによります。

㉑ 明治用水旧頭首工



川から用水を水路に引き入れるための施設。現在の頭首工ができる前の1909年に人造石で造られました。船を通す閘門があります。土木学会選奨土木遺産となっています。